

三年前、新型コロナで人手不足になったことを受け、私は、「宇和島お手伝いプロジェクト」に参加し、終日、みかんの収穫の手伝いをしたことがあります。好天に恵まれた十一月のことでした。筋肉痛は残りましたが、心地よい疲れを味わうことができました。高校生も一名、同じ場所でお手伝いをしました。慣れない仕事だったと思いますが、弱音を吐くことなく、一日の仕事をやり遂げました。すばらしい仕事ぶりでした。

当日は、午前十時と午後三時に休憩が入り、みかん農家の山口さんから、飲み物とお菓子をいただきました。山口さんが、高校生に「コーヒー飲める？」と尋ねていたのを聞いて、私は、「みんな、何歳くらいからコーヒーを飲むようになるのかな。」と考えながら、みかんを収穫していました。その生徒は「飲めます。」と答えていましたが、確かに、コーヒーを飲んだことのない高校生もいるのでしょうか。これは、山口さんの気遣いだったのだと思います。

「コーヒーを飲める」＝「大人」とは思いませんが、人は、いつからか、コーヒーを飲むようになります。同じようなことが、読書の世界にもあるのではないかと思います。「絵本や子ども向けの本」から、いわゆる「大人向けに書かれた本」を読むようになるのはいつからか、それは、きっと人それぞれでしょう。

皆さんも、絵本の『はらぺこあおむし』『ぐりとぐら』から、小学生向けの「シリーズもの」などを読み、中学校では、YA（ヤングアダルト）向けの本、そして高校生となった今、読書も十人十色、様々な本を楽しんでいるのではないのでしょうか。

私の読書体験を振り返ると、いわゆる小説を初めて読んだのが『二十四の瞳』でした。小学校高学年の頃だったと思います。小豆島の小学校を舞台にしたその小説の、最後の同窓会の場面は、当時の私の胸を熱くしました。

中学生になってからは、部活動や勉強で、あまり本を読む時間がなかったように思いますが、当時流行していた横溝正史の金田一耕助シリーズは、だいたい読みました。なんとなく気が向いて、ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』を読み、感想文を書いたことを覚えています。『二十四の瞳』も『車輪の下』も、学校を舞台とした小説ですから、教員になりたいと思っていた私にとって、心引かれる本だったのかもしれませんが。

ほかにも、私は、宮沢賢治、宮本輝、村上春樹といった作家の本をよく読みます。「がんばっていきまっしょい」（敷村良子）も、「世界の中心で、愛をさけぶ」（片山恭一）も読みました。敷村さんも片山さんも本県出身の作家です。小説だけでなく、実用本や新書を読んで、「生活の知恵」や「生きるヒント」をもらうこともあります。

いつからかコーヒーを飲むようになった人も、まだ飲んだことのない人も、読書の世界では、少し大人になって、古典的な名作や、著名な作家の本、話題になっている本を読んでみてはいかがでしょうか。忙しくて本を手にとることができないという皆さんは、朝の読書の時間などを利用して、本を読むひとときを作り出してみてください。既に、夏目漱石や大江健三郎の本を読んでいる皆さんには、読書体験をさらに積み重ねてほしいと思っています。哲学書も古典文学も、おもしろそうです。

普段の生活では味わえない感動を味わえる、「生活の知恵」や「生きるヒント」をもらえる、そして、「これからの時代を生きていくための感性」を身に付けることができる、それが読書です。気になる本を探しに、東高の図書館へ足を運んでみてください。

もしかしたら、あなたの将来に影響を与える一冊に出会うかもしれません。